

### セミナー3

「見る・観る」ことの多様性について—シェイクスピア劇を通して考える

コーディネーター 丹羽佐紀

コメンテーター 石原万里

本セミナーでは、劇中の「見る」行為及び上演作品を「観る」という観点からシェイクスピア劇を捉え、その多様性について議論した。各メンバーの発表概要を以下に記す。

#### 1. 『ハムレット』における劇中劇

鷹野みく

『ハムレット』の劇中劇『ゴンザーゴ殺し』に焦点を当て、いかにこの劇中劇が舞台上の観客、即ちガートルードとクロードィアスの心理状態やその後の行動に影響を与え、作品が展開する上で重要な役割を果たすかを考察した。

『ゴンザーゴ殺し』はハムレットが旅役者に作品を指定し、台詞の追加を頼んで演出し上演させる。ガートルードには、劇中劇の台詞や劇中劇中のやりとりを通して、不貞行為を自覚させ、罪悪感を覚えさせる。劇中劇がガートルードの心理状態に影響を及ぼし、寝室の場でついに本音を漏らす。そして、クロードィアスは劇中劇を見ることで自らが犯した犯罪を顧みて罪悪感を覚えその後の独白で自らの罪に言及する。それだけではなく、劇中劇の設定から自らも甥ハムレットに殺される未来を予測し危機感を抱き、直後にハムレットをイギリスに送ることを決める。

劇中劇は登場人物に影響を与え、作品の流れに大きく関わっている。劇中劇がもつ「演劇の力」は劇全体へ影響を及ぼす大きなものだ。

#### 2. 『ハムレット』における検閲の不在

遠藤玲奈

本発表では、『ハムレット』においてハムレットがエルシノア城で「ゴンザゴ殺し」

を上演させる場面を、女王が宮廷で演劇を上演させていたエリザベス朝当時の宮廷文化を投影して観る（読む）ことができると指摘した。『ハムレット』には、祝典局長（The Master of the Revels）のような役割を持つキャラクターの登場や、少年劇団や大学演劇といった演劇環境への言及などがあり、当時『ハムレット』を観ていた観客にとって「ゴンザゴ殺し」の上演は鏡のように映ったと言える。『ハムレット』の劇中劇と実際の宮廷演劇の間にこのような類似点がある一方、相違点もある。現実では観客に不快な思いをさせないように、祝典局長による検閲が行われていたのだが、『ハムレット』の劇中にはそれがなく、王を怒らせるのである。王の気持ちを掻き乱し、それを機に『ハムレット』のドラマが動く様は、宮廷演劇の在り方を知っていた観客の目にはより劇的に映ただろうと結論付けた。

### 3. 宝塚歌劇『ハムレット』における女性演劇のパフォーマンス

#### 童知微

発表では主に宝塚歌劇団のシェイクスピア翻案劇『ハムレット』を取り上げ、英国映画版と比べ、女性演劇のパフォーマンス的特徴を検討した。

2010年に上演された宝塚歌劇『ハムレット』を、ローレンス・オリヴィエが製作・監督・主演した映画『ハムレット』（1948年）とケネス・ブラナーが監督・主演した『ハムレット』（1996年）と比べ、「宝塚歌劇のレビューと男役中心論」、「女性キャラクターの増員」、「男女間のパフォーマンス」という三つのポイントを中心にして分析を行った。

宝塚歌劇では舞台にレビュー風の演技を入れ、男役を輝きの中心に位置づけて演じる。演出家の演出と女優たちの演技は、原作や映画版にある男女間の格差と男性キャラクターから女性キャラクターへの圧迫感を和らげ、男性の俳優が演じるハムレットと鮮やかな対照をなす。また女性キャラクターの増員により、原作にある男性主体の中核を弱める。

結論として、宝塚歌劇では男性主人公のハムレットに女性性を加え、女性キャラクタ

一への同情と共感が示されている。映画版と比べるとより家族愛、恋愛と人の感情を重視すると考えられる。

#### 4. 野田秀樹版『真夏の夜の夢』—多層構造の物語と解き明かされる2つの謎—

江頭史歩

本研究では、野田秀樹が1992年に潤色・演出した『野田秀樹の真夏の夜の夢』の構造と作劇法を分析することで、野田がテーマをいかにして浮かび上がらせ、観客にどのように作品理解を促したかについて探求した。

野田は『真夏の夜の夢』の4人の恋物語だけを残し、原作では詳細に語られることのなかったヘレナの夢物語として再構成したが、その大幅な改稿・潤色には、シェイクスピアやその時代に縁の深い要素を盛り込むほか、自身の作劇法とシェイクスピア喜劇の祝祭性に共通点を見出した演出で、新たな「シェイクスピア劇」を観客に提示した。一方で、舞台設定には日本的要素を多分に取り込み、西洋的要素をできるだけ排除することで、日本の観客の理解を手助けした。

また、野田は自身の創作戯曲と同様に、多層構造の物語筋の中に「謎」を織り込み、その解決を促す形で、複雑に展開していく物語と作品のテーマを観客に読み解かせていたことが明らかになった。

#### 5. The Dramatical Role of Music in the Latvian Productions of *A Midsummer Night's Dream* and *Richard III*

Martins Zarins

During the conference of October 2020, I, Martins Zarins, had a great honour to give a presentation about the dramatical relationship between Shakespeare's two plays staged by Latvian Academy of Culture — “A Midsummer Night's Dream” and “Richard III”. The presentation contained two case studies of how music was composed by me under the influence of reading the plays, watching and a being a part of the rehearsals and what were the differences between these two processes. The presentation was given from a point of view of a professional stage director (my formal education) who decided to continue the path of music writing after formal studies. The presentation was centered

around this circumstance in order to understand, how contrast works between a scene and music created for it. Another important aspect discussed in this presentation was the relation between the composer and the director during the process.

## 6. 演劇映像と上演を観る観客反応の差異

熊谷由里子

本発表では、演劇の映像化が進む今日の社会状況において、演劇映像を観ることと、劇場において上演を観ることとの関係性について考察した。初めに、近年のイギリスにおいて起こり、ますます盛んになっている演劇映像の配信状況について分析し、その中から2019年春に日本で公開されたNT Live『リア王』を取り上げた。日本においてはディレイ・ビューイングとなっしまい、劇場で観ている状況に近づける努力がなされているにも関わらず、カメラや編集といった第三者の目が加わっていること、クローズアップが多用されていることも手伝って、演劇映像鑑賞は映画を鑑賞する体験に近づいていると言える。一方、劇場において上演を観る際には、劇場の匂いや、俳優やスタッフが一体となって放出する熱量といった、その場にいるからこそ感じることを五感で感じながら、劇場で創造世界、異世界への橋を渡る経験をしていると言える。デジタル化した今日の社会状況においてこの差が小さくなっており、演劇映像を動画等で見たに過ぎないのに「その劇を観た」と言ってしまう人々も出現していることが報告されている。「観る」ことに偏って生きる時代の到来であり、「観る」ことの意味を今後も考えていくことの意義は大きいと結論付けた。

## 7. 昆劇『血手記』と黄梅戯『夏の夜の夢』—シェイクスピア劇と中国伝統演劇の融合—

冀瑞澤

西洋演劇を代表するシェイクスピア劇は、中国において伝統演劇と融合して、鮮明な特徴を持った上演が多く行われてきた。本論は、シェイクスピア原作を基にして中国伝統演劇の形式で翻案した昆劇『血手記』（『マクベス』）と黄梅戯『夏の夜の夢』を取り

上げて、原作との相違点に注目しながら、「見る」という視点から、シェイクスピアと伝統演劇の様式がいかに融合しているかを検討した。

昆劇『血手記』と黄梅戯『夏の夜の夢』、この二つの作品を比較すると、前者は伝統演劇様式を踏まえて、西洋のストーリーとは思えないほどに伝統演劇の美しさをきちんと保った翻案作品となっている。それに対して、近年の翻案である黄梅戯『夏の夜の夢』は、様式と内容はより現代的で、西洋的要素と並行しつつ、異文化のコンテクストで生まれた二つの劇種類を一つの舞台に融合することに困難を感じさせる点もある。

今回は昆劇の『血手記』と黄梅戯の『夏の夜の夢』と分析したが、他にも多くのシェイクスピア翻案劇が中国では上演されている。シェイクスピアや西洋演劇を中国伝統演劇に翻案することは、ある意味でお互いに新しい命を与えることになる。

しかし異なる翻案手法によって、実際のステージ効果は大きな差異を生み出している。シェイクスピア等の外来演劇をローカライズする場合には両者のバランスを取ることが重要な課題である。

